

「環境社会学」参考文献リスト

【総合】

『講座 環境社会学』 有斐閣

1巻から5巻までである。日本における環境社会学のバイブル的存在。特に第1巻では、環境社会学の基本的な視点がよくまとめている。

『シリーズ 環境社会学』 新曜社

1巻から6巻までである。『講座・・・』が理論編とするならば、こちらは実践編といえる。なおこのシリーズは、各巻のタイトルが書名になっており、検索にかかりにくいので、以下に全巻のタイトルを記す。

環境・ボランティア・NPOの社会学

コモンスの社会学

歴史的環境の社会学

観光と環境の社会学

食・農・からだの社会学

差別と環境問題の社会学

『リーディングス環境』1～5巻 有斐閣

環境問題に関する論文をテーマ別にまとめた論文集（こういう論文集のことをリーディングスという）環境問題を考える上で重要な論文が網羅しており、便利。

第1巻 自然と人間

第2巻 権利と価値

第3巻 生活と運動

第4巻 法・経済・政策

第5巻 持続可能な発展

『環境社会学研究』第1巻～

環境社会学会が編集している学会誌。年一回刊。目次だけでも目を通してもらえば、1つくらいは関心のあるテーマを扱っている論文にであらう。

なお、一般にA5版の多い学会誌にあって、これはB5版と大きめ。ページ数も多い。図書館には書籍として登録されているところが多い。

『社会学評論第45巻4号 特集・現代社会と環境問題 環境社会学の視点』

1995年に出版された『社会学評論』の環境社会学特集号。社会学「界」に対して、新参者である環境社会学が自らのアイデンティティを提示すべく取り組んだ特集号（だと思ふ）なかなか熱い主張が見られ、おもしろい。個人的には生活環境主義を批判する三浦論文が出色。

船橋晴俊・飯島伸子編 1998 『講座社会学12 環境』 東京大学出版会

講座社会学シリーズの一巻。飯島先生の『総論』は、環境社会学の歴史を知るために便利。

飯島伸子編 1993 『環境社会学』 有斐閣

日本における初めての環境社会学の教科書。自ら「教科書」といっているだけあって、環境社会学の諸領域を網羅的に扱っており、内容は多岐に及ぶ。10年以上前の本であるのに、その内容は少しも色あせていない。

船橋晴俊・古川彰編 1999 『社会学研究シリーズ 理論と技法 25 環境社会学入門 環境問題研究の理論と技法』 文化書房博文社

副題にあらわれているように、環境問題を社会的に研究するための方法論についてまとめている。特に「調査を通しての理論形成」を実現することを主眼にしている。

堀川三郎 1996 「公害・環境問題と環境社会学」

有未賢他編『社会学入門』弘文堂所収の論文。環境社会学の大まかな流れを知るために有益な論文。

【生活環境主義】

鳥越皓之・嘉田由紀子編 1984 『水と人の環境史 琵琶湖報告書』 御茶の水書房

鳥越皓之編 1989 『環境問題の社会理論 生活環境主義の立場から』 御茶の水書房

姉妹本として出されている2冊。前者は一般的・啓蒙的事実について、後者は生活環境主義の社会科学的な論理構成についてまとめている。生活環境主義の方法論を知りたいのなら後者の鳥越論文、松田論文が参考になる。

鳥越皓之 1997 『環境社会学の理論と実践 生活環境主義の立場から』 有斐閣

鳥越先生の研究をまとめた論文集。序章と第一章は必読。

【環境問題と社会運動】

『講座・・・』の4巻

長谷川公一 2003 『環境運動と新しい公共圏 環境社会学のパースペクティブ』 有斐閣

社会運動論研究者であり環境社会学者でもある長谷川公一の研究をまとめた論文集。環境運動、NPO、原子力発電所問題、グリーン電力、公共圏と、さまざまな内容が網羅されている。

大畑裕嗣ほか編 2004 『社会運動の社会学』 有斐閣

社会運動論の若手研究者による社会運動研究の入門書。教科書にすることを目的として編まれているので文章も比較的わかりやすい。環境問題に関する運動について扱っている章もある。

伊藤守ほか編 2005 『デモクラシー・リフレクション - 巻町住民投票の社会学』 リベルタ出版

日本で最初の住民投票を実現させ、最終的に原発建設計画を白紙に追い込んだ新潟県巻町(現新潟市)の住民運動について、民主主義の視点から考察した本。原発を巡る地域住民の対立や、そのような地域において運動を展開していくための工夫など、地域の実態が詳しく描き出されている。一般向けにかかれてある本ということもあり、読みやすい。

山秋真 2007 『ためされた地方自治 - 原発の代理戦争にゆれた能登半島・珠洲市民の13年』 桂書房

原発の受け入れを迫られていた珠洲市の住民による反対運動に関わってきた都会の若い女性によるノンフィクション。地域住民の苦悩だけでなく、「よそ者」として地域の運動に関わることの葛藤についても赤裸々に描かれており、一読に値する。

【環境正義】

石山徳子 2004 『米国先住民族と核廃棄物 - 環境正義をめぐる闘争』 明石書店

アメリカの先住民族の居留地に核廃棄物の貯蔵施設を建設するという問題を、環境正義の観点から詳細に考察してある。良書だが高額かつ難易度高し。

鎌田遵 2006 「「辺境」の抵抗 - 核廃棄物とアメリカ先住民の社会運動」 御茶の水書房
上記『米国先住民族と・・・』と類似の内容(2人は恋愛関係にあるらしいし・・・)。こちらのほうが読みやすいし、やや安い。「先住民学」という独自の視点から考察してある点が特徴。なお鎌田氏には、岩波ジュニア新書に『ぼくはアメリカを学んだ』という、彼自身が18歳でアメリカにわたって以来の成長記がある。

【環境倫理学】

鬼頭秀一 1996 『自然保護を問いなおす - 環境倫理とネットワーク』 ちくま新書

「人間と自然の関係性」に焦点をあてる著者の主張は、環境社会学を学ぶ上でもひじょうに参考になる。また、環境思想の系譜についてまとめている章があるので、環境思想および環境倫理について学ぶのにも便利。

加藤尚武 2005 『新・環境倫理学のすすめ』 丸善ライブラリー

『環境倫理学のすすめ』(1991)の続編。なぜ環境を守らなければならないのか、どのような環境を守るのか、どのようにして環境を守ることが可能になるのか、などといった環境をめぐる諸問題に、倫理学の視点からこたえている。新書なので安価。文章も平易。

その他、各論については熊本に直接お問い合わせ下さい。 kumamoto@aoni.waseda.jp